

2015 年度秋学期 授 業 評 価 報 告

科 目 区 分 名	外国語科目
-----------	-------

アンケート結果、今後の改善、その他特記事項（授業方法の工夫等）についての総評

外国語科目では 98.1%(2013 年度 97.1%、2014 年度 98.1%)の実施率であった。回答率は、90.9%(2013 年度 87.9%、2014 年度 85.0%)であり、ほぼ同じ傾向を示している。3 年間を比較して全体的な傾向として、以下 4 点が挙げられる。

- (1) 授業内容の理解、授業に対する意欲的な取組、教員の話し方の理解度、授業内容とシラバスの一致、教員の授業に対する配慮に関する項目は平均値 4.0 を超え、全体的に高い。このことは昨年度秋学期とほぼ同じ傾向を示している。全体の科目平均とほぼ同じ傾向を持つ。
- (2) 授業による知的好奇心の高まりも平均値 3.8 以上であり、全体的に高い傾向にある。これは 3 年間とほぼ同じ傾向を示している。ただ、この項目が全学の科目平均からはやや低い傾向がある。語学という科目の性質によるものだろうか。学生に知的好奇心が湧くような授業を展開してほしい。
- (3) 外国語科目の授業外学習時間が 0.79 時間（2013 年度 0.73 時間、2014 年度 0.62 時間）であり、全学平均(0.69 時間)をやや上回る。全体として 6 割近くの学生が 30 分程度の授業時間外の学習時間である。2013 年度 6 割、2017 年度は 7 割が 30 分以内であった。学習時間が少なくなった傾向が読み取れ、やや心配である。ただし、外国語別に見て来ると、中国語の授業外学習時間が長い傾向が見られる。これは、E-learning を使って学習しているためであり、教員が積極的に使うように促しているためである。この E-learning は語学学習には効果的であると思われる。今後他の外国語に関しても同様な取組が必要になるであろう。
- (4) DWCLA10 の選択率は、思考力とコミュニケーション力がそれぞれ、54.9%(2013 年度 52.5%、2014 年度 51.7%)、コミュニケーション力が 41.6%(2013 年度 36.2%、2014 年度 38.1%)であり、この科目の特徴が表れている。この傾向は、昨年秋学期とほぼ同じである。

全体的には、やや異なった傾向も見受けられるが、3 年間とほぼ同様な傾向が読みとれる。この科目は予習、復習を最も必要とする科目である。しかしながら、(3)から分かるように、授業時間以外の学習時間が全体的に低いことを考えると、学生がもう少し多くの時間を学習することが重要である。このことは、昨年度も指摘した。また、グローバル人材育成等のことを考えても、全体的にもう少しコミュニケーション力を育成するような授業展開が必要である。そのためには、1 クラスの人数や E-learning の導入に関しても考慮する必要がある。今後の一層の努力を期待すると同時に学習環境の整備に取り組みたい。

上記の枠内に収まる範囲内でご記入ください。